

児童の行動的 QOL の拡大に向けた否定選択肢の導入
－ 個人と周囲の両視点からの検討 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
障害・行動分析クラスター
西川 めぐみ

本研究では絵カードを用いて否定選択肢を導入し、それが対象児の選択肢の拡大につながっているかについて検討した。対象児・者の行動的 QOL を拡大するためには、本人の選択機会と選択に基づく行動を保障することが重要である。この機会と行動の保障は「自己決定の保障」を意味し、否定選択肢と、それを他者に要求できる環境を設定することで実現する。対象児・者の正の強化で維持される行動の選択肢の拡大を促進するためには、周囲が提供する選択肢の中に否定選択肢が導入されることが必要であると考えられる。

2 名の自閉症スペクトラム児とその保護者を対象として介入を行った。対象児に対しては正の強化で維持される行動の選択肢の拡大を目的として、(a)既存の選択肢を否定し、(b)新たな選択肢を周囲に要求する機能を持つ否定選択肢(チェンジカード)の導入を実施した(介入 1)。一方、保護者に対しては行動的 QOL に関する教育的介入を実施した(介入 2)。対象児とその保護者、両者への介入を通して、対象児の行動的 QOL の拡大について検討した。

介入の結果、対象児 2 名とも、否定選択肢の導入による選択肢の拡大がみられた。事例 1 では保護者による否定選択肢の設置場面の拡大によって、対象児の選択肢が複数の場面で拡大した。対象児の行動的 QOL の拡大を促進するためには、本人と周囲の両視点から否定選択肢を導入する必要性が示唆された。